

自分らしく生きることを支える 特別支援教育

NPO 法人東京都自閉症協会 綿貫愛子

本日のテーマである「自分らしく生きることを支える特別支援教育」は、特別支援教育の本質と考えている。どうしたら学校現場で実現できるかを一緒に考えていきたい。

発達障害とは、脳機能の違いにより、物事の捉え方や行動パターンに違いがあることで、日常生活に支障のある状態のことである。そして、本人の本質である脳機能の違いがあることをどうこうするというのではなく、困り感のある「状態」や「状況」を解消すること、それを支えるのが支援である。

支援者が思い描く「支援の理想像」に本人を適応させて、その通りにできることを目指すのが支援ではない。児童生徒本人が主体的に自分を知り、自分を使いこなすこと、もっと言えば、本人が自分の人生をデザインし『自分』を生きること、そのプロセスを支えるのが教育や支援の役割である。

私が思うASDの定義は、同じ対象を他者と共有することが難しい“障害”。そのため、いかに本人たちとの共有体験を保証していけるかが大切である。専門家のASDに関する説明と、自分たちの感じていることと意味合いが違うことがある。例えば、なぜ尖足があるのか。よくある説明は、足裏の過敏があるからというものだが、私の場合は固有受容感覚（力の入れ具合）の問題で尖足をしている。足裏をつけて歩くよりも姿勢保持がしやすい、ちゃんと立っている、歩いているという感覚、床からのフィードバックがあり、自分にとっては快適なのだ。「特徴」や「問題」と説明されることには、本人にとっては意味のある行動がたくさんあり、先生方には共感的に見てもらえたらありがたい。

～以下、話の内容を要約して記す～

【行動問題①自己刺激行動】自己刺激行動をなぜやるのかと問われれば、自己調整のためにやっている。…～省略～ 疲れてきたな、飽きてきたな、今ちょっとわからない状況だなという手掛かりにしてもらおうことが最初かと思う。

【行動問題②探索行動】本人にとってわかる行動、役割が提示されていない環境では、それを探するために離席することがある。…～省略～ ここで離席しているという事実だけに注目すると行動の問題と言われてしまうが、本人には必要な行動かもしれない。

【行動問題③安全確保行動】本人にとっての不安や恐怖の対象や状況を回避するために、あえて逸脱行動をとるのだが、この逸脱行動が問題になる。…～省略～ 安全確保行動として捉えると、本人の背景にある不安や自信のなさにもっとフォーカスしてもらえないか。

【間主観的アプローチ】本人が体験している世界の中に、共感的・内省的なスタンスをもって関わっていくというアプローチ。…～省略～ 中立性を保ったスタンスではなく、共感的・内省的に本人の世界を推察して、一緒に探していくというアプローチが大事だと思っている。

【共同注意 (joint attention)】同じ対象にうまく注意を向けて、その相手が期待する行動に気付いて、その通りに行動できる、とある。これは多くの人が無意識にやっていることだが、ASDのコミュニケーションの難しさは、この共同注意の難しさがあるからだと言っても過言ではない。…～省略～ 大人が見てほしいものに子どもに注目させるのではなく、子どもが見ているものに大人が視線を合わせるものがスタートであり、どの支援の基本もここにある。共同注意へのアプローチとして、身体接触を伴う直接的なコミュニ

ケーションは有効である。直接的な身体接触を伴うハイタッチによって… ～省略～ 本人が注意を向けやすく、どのような行動をすればよいかを共有できる。

【ASDコミュニケーション①クレーン行動】ASDコミュニケーションにはいろいろある。クレーン行動は動作だけではなく言葉でも存在する。… ～省略～ 本人がやってほしいことや言ってほしいこと、まずそこから関わるというのが、コミュニケーションのスタートである。

【ASDコミュニケーション質②問嗜好現象】では、答えが返ってくると満たされた気持ちになり、このやり取り自体がコミュニケーションになっている。… ～省略～ 正しい形で話すことにこだわらず、内側にある意欲の方を大事にしていきたい。

【ASDコミュニケーション質③エコラリア】遅延性エコラリアと即時性エコラリアがあり、即時性エコラリアはいわゆるオウムがえしのことである。… ～省略～ 本人にとってどういう意味があるのかと見ていただくと、共有体験はもっと広がる。

【ADHD】のメカニズムとして、ドパミンやノルアドレナリンといった神経伝達物質の不足や調整異常がある。そのため、楽しいことを感じにくかったり、退屈を感じやすかったりする。… ～省略～ きちんと授業を構造化して、機会とやり方を共有できると、本人は意欲を発揮できる。

【ナルコレプシー】という過剰睡眠になる状態があり、日中でも突然眠ってしまう病気なのだが、ナルコレプシーとADHDに遺伝的に関連しているという研究がある。… ～省略～ まだ新しい知見がたくさん出てくるので、そのような情報も積極的に取り入れてほしい。

ASDのある人の生活リソースは、社会的多数派の方法論を身に付けることに大きく消費されてきた。最近の研究で、ASD特性をカモフラージュしたり、隠したり、より定型発達的に見えるようにしようとする試みが、本人たちのメンタルヘルスに深刻な影響を与えているという指摘がある。これはこうしなければならない、社会ではこうだ、ということを経験してきた子たちが、そこに過剰に適応しすぎてそれによって自分のメンタルヘルスがやられている。これは、支援が「障害の状態」を作る可能性があるということに、支援者がもっと敏感にならなければいけないということを示している。

最近よいムーブメントだと感じているのは、ニューロダイバーシティという、神経学的な差異を、障害や機能不全ではなく、ヒトの多様な変異の在り方として認識し尊重していこうとする考え方である。この中で、ASD概念を多角的に検討し、捉えなおそうという動きが出てきている。ASDは他者に共感することは難しいと言われてきたが、人は類似する他者に対して共感するという知見も出てきている。多様な表現方法や生き方が肯定され、自分らしく生きていくことを支えていく支援の在り方について、考えていく必要がある。

インクルージョンは、単に多様性を認めるだけでなく、ともに発展するということが重要だと考える。このダイバーシティ&インクルージョンを前提とした支援を考えた場合に、支援者が一方的に何かを提案、提供するものではなく、相互作用の中で様々な人と対話し、様々な表現方法を取り入れ、新しい価値をお互いに相互主観的に作り上げていく、これが共生社会につながっていく。

キャリアというとワークキャリアの話になりがちだが、もっと広い概念で、生涯・個人の人生その生き方そのものを表す言葉である。他者がどうあってほしいかではなく、自分がどうありたいかという自分の軸が重要で、その実現を支えていくのが教育や支援の役割である。キャリアデザインの土台を育てる中で自己決定は重要で、所得や学歴よりも自己決定の経験が、主観的幸福感に大きく寄与していると言われている。そのため、日常のいろいろな場面で、小さな自己決定を積み重ねていくことが重要である。

まとめとして、個別の教育支援計画や指導計画の中に、きちんと本人のストーリーが入っているかということをお大事にしていきたい。障害特性や発達段階的にそれが正しいように思える目標でも、本当に本人にとっての課題や目標になっているか、ASDだからではなくその子だから、という視点で、本人のライフキャリアを踏まえた目標や課題の設定が重要である。